ひょうご人権ジャーナル

ひろげよう こころのネットワーク

きずな

2012年
（平成24年）
5

5月5日　こどもの日

国民の祝日の一つで、子どもの人格を重んじ、子どもの幸福を図ることなどを目的に1948（昭和23）年に制定。この日から1週間は、児童福祉週間として全国各地で児童福祉にちなんだ行事が開催されます。

特集テーマ　子ども

子どもたちの「心の声」に耳を澄ませて

2 小学生が贈る「赤ちゃんへの手紙」
西宮市文化振興課

3 子どもからのＳＯＳに気づく
山野則子さん（大阪府立大学人間社会学研究科教授）

4 虐待や養育不安など問題を抱える親や子を見守る
こども家庭支援センターキャンディ（尼崎市）

5 親と子のそれぞれの声を聴く心のほっとライン
ＮＰＯ法人子どもフレンドリーネット・神戸（神戸市中央区）

6 家庭に居場所を失った10代後半の子どもを受け入れる
社会福祉法人カリヨン子どもセンター（東京都）

7 時間をかけてじっくりとひきこもり支援に取り組む
NPO法人 神戸オレンジの会（神戸市兵庫区）

8 情報ぷらざ

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会

特集

子ども

児童虐待やいじめなど子どもの人権を取り巻く状況はますます深刻化しています。今月は、私たちが普段から子どもの心を理解するとともに、家庭、学校、地域と、社会全体が一体となって子どもを守り、育むことの大切さについて考えてみましょう。

近ごろの話題

西宮市
文化振興課

小学生が贈る「赤ちゃんへの手紙」

小学生がつづる心温まる文章

「赤ちゃんへの手紙」は、西宮市の小学生たちが生まれてくる赤ちゃんに手紙を贈るという取り組み。毎年、市内の小学生から募集し、出生届を出しに来られた保護者に窓口で渡しています。

「赤ちゃん、生まれてきてどんな気持ち?」「西宮はいいところだよ」「大きくなったら一緒に遊ぼうね」「赤ちゃんが生まれてきてくれて、お父さんもお母さんもきっとうれしいよ」。手紙には誕生を祝う言葉とともに、西宮のいいところや、保護者がどんなふうにあなたを思っているかなど、小学生たちの温かな気持ちがつづられています。一方、手紙を受け取った保護者からは「わが子がみんなに望まれて生まれてきたのだという気持ちが実感できた」「人の心の温かさを感じられてうれしい」などと反響を呼んでいるそうです。

命の尊さを考える機会に

赤ちゃんへの手紙は、市のまちづくり懇話会の会長だった柿木健一郎さんが提案。2006（平成18）年にスタートしました。

「赤ちゃんへの手紙は〝命の初心〟だと思います」と柿木さん。「赤ちゃんが大きくなって手紙を読んだとき、自分がどれだけ祝福の温かい光に包まれて生まれてきたかが分かるはずです。また、手紙を書いた小学生には命の尊さを再認識するとともに、自分たちが暮らすまちへの愛着を深めてほしいですね」と続けます。

世間では、児童虐待や子どもたちが巻き込まれる事件が多発し、育児に悩む親への支援のあり方が問われています。「小学生たちの素直な気持ちで書かれた手紙を通して、地域のみんながつながっていると感じてもらえれば」と柿木さんは言います。

西宮市では、赤ちゃんへの手紙を多くの人に読んでもらおうと、昨年9月、これまでの手紙の一部を冊子にまとめて発行。他府県からも命の尊さを考える学習会や地域の人権学習の教材として活用したいという問い合わせが多く寄せられています。

「赤ちゃんへの手紙」の冊子には、手紙を受け取った保護者から小学生たちへのメッセージも掲載されています。西宮市役所１階の売店か郵送で購入できます（200円）。詳しくは西宮市文化振興課まで。
TEL 0798 (35) 3477　FAX 0798 (35) 4045

「赤ちゃんへの手紙」ホームページ
http://nishinomiya.jp/akachan/index.html

メッセージ

子どもからのSOSに気づく

大阪府立大学人間社会学研究科教授 山野（やまの） 則子（のりこ） さん

家庭のSOS

子どもの虐待、いじめなどの人権侵害の状況に触れたとき、支援の視線は被害者にいきます。

加害者である親や子どもに向けて、なぜこうなったのかを理解しようとする視点や気持ちを向けることは、状況が悲惨なだけに困難を伴います。しかし、虐待やいじめの問題は被害者のSOSでもありますが、加害者の声なき叫びでもあるのです。

家族の状況

親の状況を見たとき、近隣との交流がなく、不安感は増大する一方で、経験など確認するよりどころがない、そして周りからの批判を気にするという閉塞（へいそく）した子育て状況にある方が非常に多くなりました。また、経済的にも就学援助を受けている家庭が約※15％と報告されています。非常に追い込まれた状況にあると言えます。子どもどころではない生活に追われる、あるいはわからない不安から不適切な行動に至ることもあります。そういった生活環境の中では子どもたちに影響を及ぼすこともあります。

声なき声を拾う意義

不良行為など非行問題で施設に入所している子どもたちのうち、6、7割に被虐待の経験があり、被害経験が加害行為に変わっていくことがわかります。不登校問題の背景においても、親の登校させない決定や養育放棄など虐待によるものも増加傾向にあります。虐待行為が子どもにさまざまな問題を引き起こしていることは明らかです。

つまり子どものSOSに気づくことは、その後の子どもたちに降り掛かるかもしれないさまざまな問題をつくらなくて済むかもしれないということです。早期に発見することが事の深刻化を防ぐ可能性につながります。

温かい声をかけ合う地域づくり

では、地域で何ができるのでしょう。批判を気にする子育て家庭は、批判的視線に非常に過敏です。声なき叫びを出せないということです。

親も子も「助けて」と言える環境をつくる、失敗してもいい、完璧な子育てなどないという視線が充満しない限り、安心してSOSは出せないでしょう。SOSを出せる地域づくり、温かい声かけが自然に出る地域にすることが地域のできることではないでしょうか。

※2010年の就学援助の対象となったのは155万1083人で、公立小中学校の全児童・生徒数の15％強を占める（文部科学省調べ）。

プロフィール
博士（人間福祉）。元堺市家庭児童相談員。文部科学省家庭教育支援の推進に関する検討委員会委員、大阪府スクールソーシャルワーク事業スーパーバイザー、尼崎市子どもの育ち支援条例策定委員を経て、尼崎市子どもの育ち支援ワーカー・スーパーバイザーなどを務める。著書に『子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク』『よくわかるスクールソーシャルワーク』『スクールソーシャルワークの可能性』など。

取材ノートから

虐待や養育不安など問題を抱える親や子を見守る

こども家庭支援センターキャンディ

（尼崎市）

児童家庭支援センターの役割

児童虐待の増加や地域の子育て力の低下などを踏まえ、見守りが必要な親子を継続的に指導し、24時間体制で相談に応じるために設置されている「児童家庭支援センター」。県内に8カ所あるうちの一つ、尼崎市の「こども家庭支援センターキャンディ」は、児童養護施設「子供の家」に併設されており、ソーシャルワーカーや心理相談員など専門のスタッフがいます。

2010（平成22）年度の相談件数は約1800件。虐待や家庭の経済的な事情など、児童相談所からの委託で継続的な指導が必要なケースのほか、不登校や発達の遅れを心配する相談もあります。最近は教育機関とも連携して対応しています。

地域の身近な存在として

キャンディの活動には学校や行政、関係機関などとの連携が不可欠であり、特に地域との信頼関係を重視しています。問題を抱えている子どもや、子育て中の保護者を支える地域に向けて、気軽に相談してもらえるようさまざまな取り組みをしています。

代表的なのが、ホールやプレイルームを活用し、親子が自由に遊べる「まちの子育てひろば」や「プレイルーム開放」などのプログラムです。また、子育てに関する多様なプログラムやトレーニングなども実施しています。参加した親からは「小さな悩みも気軽に相談できる」「他の方と一緒にアドバイスを聞くことで新たな発見もできた」と好意的な感想が寄せられています。

主任相談員の石田佳菜子さんは「専門家も交えた取り組みは、子どもの保護、子育てや養育不安についての情報共有、ネットワークづくりにも有効に機能しています」と話します。キャンディでは地域の特徴やニーズも考慮しながら、子どもや親へのより良い支援を目指しています。

キャンディにいろいろな味があるように、子どもたち一人ひとりの個性を大切にしたいという思いが団体名に込められています

じんけんガイド① 児童家庭支援センターのご案内

児童家庭支援センターでは主に児童虐待や不登校、発達障害児等の相談を受け付け、地域に密着した専門的な支援に取り組んでいます。相談内容の秘密は厳守します。

■兵庫県		
子そだてサポートひかり	宝塚市御殿山 2-1-67	TEL 0797 (81) 2775
こども家庭支援センターキャンディ	尼崎市若王寺 3-16-3	TEL 06 (6491) 1811
児童家庭支援センター虹の丘	加古川市八幡町野村 617-4	TEL 079 (438) 2725
児童家庭支援センターすみれ	姫路市広畑区蒲田 370-1	TEL 079 (238) 3553
児童家庭支援センターすずらん	たつの市新宮町光都 1-6-1	TEL 0791 (58) 1144
児童家庭支援センターリボン	朝来市山東町滝田 172-2	TEL 079 (676) 5035
■神戸市		
神戸少年の町子ども家庭支援センター	神戸市垂水区塩屋町梅木谷 720	TEL 078 (751) 0123
神戸真生塾子ども家庭支援センター ロータリー子どもの家	神戸市中央区中山手通 7-25-38	TEL 078 (341) 6492

子ども専用電話
「子どもフレンドリーライン・神戸」
TEL 078(265)1555
開設日時／火曜、木曜　16:00 ～20:00

子と親のための電話
TEL 078(265)1555
開設日時／木曜　16:00 ～ 20:00

親と子のそれぞれの声を聴く 心のほっとライン

NPO法人 子どもフレンドリーネット・神戸

（神戸市中央区）

受話器越しに聴く心の声

子どもたちの心のつぶやきや悲鳴、苦悩。誰かに聴いてほしい、でも親やきょうだいには話せない。かといって専門家にあらためて聴くほどのことでもない…。そんな時、〝第3の大人〟が意見や思い、悩みを存分に聴くことで、子どもたちが気持ちを静め、自ら問題解決に向かうことにつなげてもらおうと設立されたのが、「NPO法人子どもフレンドリーネット・神戸」です。

スタッフは全員がボランティアで、専門のトレーニングを経て〝電話の聴き手〟に就いています。1999（平成11）年に「チャイルドライン神戸推進委員会」として発足し、2009（平成21）年7月、地域により根差した活動と、子どもだけでなく大人たちへの啓発も目指して現在の名称に変更。翌年4月に「子育て中の大人のための専用電話」を試験的に開設しました。子育ての悩みや苦労を聴くことで、親たちに自分を見つめ直し、子どもにゆとりを持って接してもらえるよう努めています。

また、相談者の声からは現代の親と子を取り巻く課題や悩みが見えてきます。その解決方法を考えることを目的に、定期的に専門家を招いて公開講座を開催しています。

直接声を聴くことの効果

最近は、子どもからの電話は減少傾向で、親からの電話が増えています。時には、「こんなに自分の話を聴いてもらったのは初めて」と喜ばれることもあるそうです。

「携帯電話やパソコンのメールでコミュニケーションを取る機会が増えている今、電話をかけてきた人は励ましの言葉を直接聴くことですごく心が楽になっているようです」と理事の谷口美保子さん。同じく理事の藤井伸子さんは「電話をかけてきた子どもの声が、最初は悲痛な感じだったのが、徐々に明るくなってきた時、役割の重要さを再認識します」と語ります。

スタッフが最も大切にしているのは「一緒に考え、聴く姿勢」。常に電話をかけてきた人の目線に立って、聴くことが求められます。

「一人で思い悩まず、電話してほしいですね」と理事の谷口さん（右）と藤井さん

きずなライブラリー
～おすすめの一冊～

アハメドくんのいのちのリレー
鎌田 實 著、安藤 俊彦 画、
ピーター・バラカン 訳（集英社）

医師で作家の鎌田實さんは5年越しの夢をかなえるために旅に出ます。その夢とは、ある新聞記事に小さく載った、戦争で死亡した少年の臓器を、敵国の病気の子どもたちを救うために提供したお父さんに会うこと。どうして、お父さんは愛する子どもの体の一部を提供する気持ちになったのか。その思いと愛に満ちた行動を絵本にしたのが本書です。

少年のお父さんの胸中を知るうちに、誰もが追い続けたいと願う本当の人間愛とは何かを再発見します。戦争のようないがみ合う人間の愚かな行いではなく、未来に向かって生きることの意味とは。

鎌田さんは、少年の臓器を移植された人々にも出会います。心臓を移植された少女は、将来は医師になる決意を話します。その時、鎌田さんは確信します。確かに〝いのちのバトン〟が引き継がれたことを。

▲子どもたちはスタッフと一緒に食事を作ります

まちのKIZUNAリポート

家庭に居場所を失った10代後半の子どもを受け入れる

社会福祉法人 カリヨン子どもセンター（東京都）

子どもたちの駆け込み寺

全国の児童相談所に寄せられる児童虐待の相談件数は年々増加し、5万件を超えています。児童虐待等で家に居場所がなくなった子どもには児童相談所の一時保護がありますが、10代後半の子どもは受け入れが難しいのが現状です。そこで全国的に注目されているのが、民間の子どもシェルター（一時避難所）です。

社会福祉法人カリヨン子どもセンターが運営する「カリヨン子どもの家」は2004（平成16）年、さまざまな事情で帰る家のない子どもたちを受け入れる国内初のシェルターとして東京都内に誕生。長年、子どもの人権救済活動に携わってきた弁護士の坪井節子さんが弁護士仲間や福祉関係者らと共に設立しました。〝カリヨン〟とは複数の鐘を一組にした打楽器。子どもたち一人ひとりの人権を尊重し、豊かな個性を発揮してほしいという思いが込められています。

カリヨン子どもの家には女子用と男子用（定員各5人）があり、職員とボランティアスタッフが交代で子どもたちと生活しています。子ども一人当たりの滞在期間は1週間から2カ月ほど。温かいご飯を食べて、ゆっくり寝て、おしゃべりや散歩、買い物や料理を楽しむなど、ゆったりとした生活を送ります。また、歯科や皮膚科、虐待の後遺症治療のため心療内科などに通院もできます。子どもは日がたつにつれてスタッフを信頼するようになり、徐々に心を開いていくそうです。

子どもには「子ども担当弁護士」が付きます。弁護士は「自分はどうしたいのか」「親とどうしていきたいのか」など子どもの思いを聞き、今後の生活について一緒に考えます。家庭復帰、児童養護施設や自立援助ホームへの入所、自立を目指して働くことなど、さまざまな選択肢を示し、必要ならば親とも面会し、子どもの決断が実現できるよう支援します。この10年間で約200人の子どもたちが巣立っていきました。

▲理事長の坪井さん

子どもからのSOSを受け止める

「生まれてきてよかった」「生きていて楽しい」と思えない子ども、ありのままの自分を受け入れられない子どもが多くなったと坪井さんは言います。親が子どもに理想を押し付け、それができないと殴る、蹴る、「あんたなんか生まれなければよかった」「出ていけ」と罵倒する。子どもにとっては「死ね」と言われているのと同じことです。

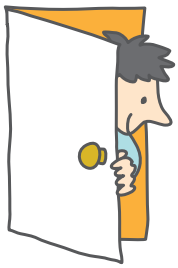
坪井さんが子どもと向き合うきっかけとなったのは25年前。自殺を図った子どもに、どう関わっていいか分からずおろおろしていた時、「自分の話を真剣に聞いてくれた人は初めて」と言われてからです。「無力な自分でも子どもの声に耳を傾けることで、一人ぼっちで苦しんでいる子どもを支えることができる」と思ったそうです。

そして今、SOSを出している子どもたちに対し「あなたに生きていてほしい」「生きていていいんだよ」と、学校や地域、関係機関・団体などとスクラムを組んで、みんなで関わり合う社会にしていきたいと語ります。

じんけんガイド② 児童虐待の通告や相談にいつでも応じます

「こども家庭センター」では、子どもと家庭のさまざまな問題について相談援助活動に取り組んでいます。時間外の緊急性の高い児童虐待などに関する通告や相談には、右の「児童虐待防止24時間ホットライン」を開設しています。

■兵庫県	
中央こども家庭センター	TEL 078(921)9119
西宮こども家庭センター	TEL 0798(74)9119
川西こども家庭センター	TEL 072(759)7799
姫路こども家庭センター	TEL 079(294)9119
豊岡こども家庭センター	TEL 0796(22)9119
■神戸市	
神戸市こども家庭センター	TEL 078(382)2525（平日 8:45～17:30）
神戸市児童虐待夜間休日相談	TEL 078(382)1900（上記以外）



時間をかけてじっくりとひきこもり支援に取り組む

NPO法人 神戸オレンジの会（神戸市兵庫区）

現在、全国の「ひきこもり」の人は約70万人に上ると推計されています（2010年内閣府）。「NPO法人神戸オレンジの会」は1999（平成11）年に当事者の親らが立ち上げ、2年後に当事者と親の居場所を開設。また、神戸市から「ひきこもり地域支援センターラポール」の運営を受託するなど、行政や医療機関等と連携し、相談業務にも取り組んでいます。

「ひきこもり問題の深刻さは、本人も家族もどうしていいか分からず、ますます自責の念にかられることです。ひきこもりに至る背景は、それぞれ異なりますがつらさは同じ。居場所で情報を共有しながら、他人とつながっていることを実感してほしいと考えています」と理事長の藤本圭光さんは、自身の不登校の経験も踏まえながら話します。

当事者一人ひとりに対する支援は長期に及びますが、その成果を実感する時があるそうです。先日も、普段ほとんど外出できない状態の人がオレンジの会の行事に参加され、「まんざらでもないなあ」とつぶやきました。「私たちは応援団。当事者が求めているものを本人の力で見つけてもらえるための道筋をつけることを考えています」と藤本さん。

今年2月、神戸で開催された「第7回社会的ひきこもり支援者全国実践交流会」では現地事務局を担当。ひきこもりの若者の社会的自立などをテーマに、外国も含む数々の事例研究に触れながら、熱い議論が繰り広げられました。

近年、当事者や家族の中には、高齢によって援助が難しくなりつつあるケースも目立ってきました。新たなサポート方法の模索が今後の課題といえそうです。

▲「ひきこもりで悩む当事者や家族は気軽にお問い合わせください」と理事長の藤本さんとスタッフの大巻智子さん

問い合わせ
NPO法人 神戸オレンジの会
神戸市兵庫区羽坂通4-2-22
TEL・FAX 078（515）8060
神戸オレンジの会　検索

県のひきこもり支援

ひょうごユースケアネット推進会議座長
県立神出学園長　**小林 剛** さん

「全国引きこもりKHJ親の会」の調査で、当事者の平均年齢がおよそ32歳であるという結果が示すように、最近はひきこもり当事者が高年齢化し、ひきこもり期間も長期化しています。また、当事者が誰の支援も受けず、ひそかに暮らしていて、本人も親も外部から支援を受けていないという問題も出てきています。

ひょうごユースケアネット推進会議では、県内の子ども・若者に関わるすべての機関・団体が一堂に会して、ひきこもり問題について多角的に活動しています。これまでに講演会や相談交流会、ひきこもり県内調査、ひきこもり当事者支援マニュアルの作成、ひきこもりホットラインの開設などに取り組んできました。

ひきこもり問題で重要なのは、民生委員や児童委員、自治会、町内会などが地域のひきこもりの人がいる家を可能な限り把握して支援につなげていくことです。早い発見は早い支援につながり、早い支援は早い回復を促してくれます。まずは親や家族、周りの人が声を挙げることです。

情報ぷらざ

スポットライト

不登校などを経験した若者が共同生活を通して元気を取り戻す

県立神出学園（神戸市西区）

若者たちは共同作業を通して、自分を見つめ直し、心身の元気を取り戻していきます

神戸市西区の雌岡山（めっこうさん）の麓、県立神出学園は5.6ヘクタールの緑豊かな敷地にチロル風の校舎や寮などが立ち、まるでヨーロッパの牧場のようなたたずまいを見せています。

同学園で学ぶのは不登校などを経験した若者たち。彼らは共同生活によるさまざまな体験活動を通して、自己の生き方や進路を探しています。1994（平成6）年、〝元気をなくした若者を元気にする学園〟として創立、以来約500人の修了生たちは仲間や学園のスタッフに支えられ、共に学び合う中で心身の元気を取り戻し、それぞれの道へ旅立っていきました。

なお、同学園では専任のスタッフや自然環境を生かし、35歳までのひきこもりの若者への支援として「1日交流体験」を実施しています。また、不登校やひきこもりの若者を抱える家庭や学校向けに、支援の取り組みを紹介する「神出学園オープン講座」も開いています。

問い合わせ▶県立神出学園　神戸市西区神出町小束野30　TEL 078(965)1122　FAX 078(965)1123　神出学園　検索

ひょうごユースケアネット〝ほっとらいん相談〟のご案内

「ひょうごユースケアネット」は1996（平成8）年、いじめや不登校など青少年の心の問題に対応するため、県内の教育、福祉、医療、保健、研究等の28機関によって発足しました。今日まで数多くの青少年問題を調査、研究し、啓発に取り組んできました。このたび、不登校・ひきこもり支援のためのホットラインを開設。専門のスタッフが当事者や親の心の叫びを聞き、的確な専門機関の紹介もします。

TEL 078(977)7555

開設日時／月曜、水曜、金曜、土曜
10:00～12:00、13:00～16:00
※祝休日と12月29日～1月3日に当たる場合は休み

ハーフタイム

「きずなライブラリー」（5ページ）で紹介した、医師で作家の鎌田實さんの講演会に行ってきました。鎌田さんはチェルノブイリ原発事故で被害を受けた子どもたちの支援活動や地域に根差した医療に取り組まれており、東日本大震災の被災地にも早くから医師として支援活動に参加されています。講演では、これまでの経験も踏まえ、「相手の立場に自分を置いて考えることで、今まで見えなかった『本当に求められていること』が見えてくる」と強調されていました。この言葉、忘れずにいたいと思います。（田中）

試写室　わが母の記（2012年）

東日本大震災で人と人の「絆」があらためて見直されましたが、井上靖の自伝的小説を映画化したこの作品は、記憶を失っていく母と小説家の息子の絆を描きます。

ベストセラー作家の伊上洪作は、戦時中に家族が自分だけを残して台湾に移住したことから、母八重に捨てられたのではないかという思いを抱いていました。年老いて認知症も出始めた八重の世話をすることになった伊上は、妻や3人の娘たちにも支えられながら、母と向き合うようになり、ついには彼女の真意を確かめようとします。

伊上と八重が「絆」を見せるラストシーンは秀逸です。また、伊上を中心にした三世代の人間模様が的確に描かれ、昭和の大家族の懐の深さを同時に感じることができます。井上靖が過ごした世田谷区の自宅書斎でも撮影され、井上の面影も写し取っています。4月28日（土）から神戸国際松竹などで上映されます。

監督／原田眞人
出演／役所広司、樹木希林、宮﨑あおい ほか　118分
問い合わせ▶神戸国際松竹　TEL 078(230)3580

【お知らせ】これまで奇数月号の7ページは「ふれあいサロン」（クロスワードパズル）でしたが、今年5月号から偶数月号に変わりました。次回は6月号になります。

(公財)兵庫県人権啓発協会　〒650-0003　神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360　info@hyogo-jinken.or.jp
兵庫県人権啓発協会　検索

2012(平成24)年5月発行